

2022年5月1日

主を受け入れる者とは

ヨハネによる福音書7：10～24

・イエス様の御意思によって

約1か月間が空きましたが、再びヨハネによる福音書に示されているイエス様のお姿を辿っていきたいと思います。今日の箇所は、とても不思議に思われることから始まっています。それは、イエス様が人目を避け、隠れるようにして、エルサレムに行かれたということです。これは、とても不思議な言葉であるなあと、私はまず思いました。それは、この直前において、せっくなので、皆が多く集まるユダヤの祭りのこの時にエルサレムに行き、皆にご自分を示すべきだという弟たちの言葉に対して、私は行かないと明言されていたからです。行かないとおっしゃったのに、どうして隠れるようにしてエルサレムに行ったのだろうかと思いました。そのイエス様の思いはどのようなものだろうかと思ったのです。

そうして考えている時に、似たようなことが有ったなあと気づかされたのです。カナの婚礼の場面で、ぶどう酒が無くなりそうになる、当時で言えば大変な事態が起こりそうになり、母マリアから助けを求められた時、「わたしの時はまだ来ていない」と言われて、一見拒絶に見える態度を取られた時のことです。勿論、その後、イエス様は最初のしるしである奇跡を行われて、皆を助けることになるのですが、どうして、マリアの願いを拒絶されるようなことを言われたのでしょうか。それは、マリアが願ったから、それに応えたという形で働かれることを良しとされなかったからです。そうではなく、あくまでイエス様ご自身のご意思としてここで働かれるのです。そのことを明らかにするために、一見拒否をするような言葉を言われたのです。

この箇所もそうだと思います。イエス様の弟たちは、兄であるイエス様に、エルサレム行きを勧めるのです。こんな辺境のガリラヤでちまちまやっているよりは、ユダヤの中心であるエルサレムに行き、それも皆が集まる祭りに時に行き、多くの人の前で力ある業を行うべきだということです。そうすれば、今よりはるかに多くの人たちを弟子として獲得できるではないか、そういう思いです。もし、その言葉に対して、「では行く」となれば、その弟たちの思いに沿っていかれたことになるでしょう。イエス様は、そうされなかったのです。それは、あくまで神様の御心に沿うためなのです。ですから、密かにエルサレムに行かれるのです。

・人の思いの歪み

イエス様がエルサレムに行かれたのは、「仮庵祭」と呼ばれる祭りの期間でした。「仮庵祭」は、前回も触れましたが、イスラエルの民にとって、最も大切な祭りの一つで

した。エジプトを脱出したイスラエルの民は、結果として40年間荒れ野を旅することになりました。その荒れ野での旅において、イスラエルの民は、仮庵、つまり、仮に建てた小屋のようなものを作り滞在し、出発する時にはそれを壊して運んで移動する、そうして過ごしました。そうして歩んだ荒れ野の旅は、困難も多かったわけですが、しかし、神様に支えられて歩んだ期間でも時でもあったのです。それで、そうして神様に導いていただいた荒れ野の旅の姿を忘れないために、1年に一度仮庵を立ててそこで過ごし、エルサレム行って神様に時別の犠牲を奉げる。そのような特別な時、その祭りである「仮庵祭」が行われることになりました。ですから、神様に支えられる恵みを、特に深く思い巡らす、そういう期間を過ごしていたのです。

その祭りに期間に、つまり、神様の恵みを更に強く思う期間になって、後の言葉を見ますと、イエス様に対する殺意が徐々に大きくなってきているということなのです。どうしてそうなってしまっているのだろうかと思います。神様のお支えを特に覚える、その時になのです。そのことによく示されていることが有ります。イエス様を葬り去ろうとしている人たちは、決して神様の御心に反することをしようとして、イエス様を葬り去ろうとしているのではないのです。むしろ、イエス様を葬り去ることは、神様の御心に沿うことだと思っているのです。本気でそう思っている。それが、この時、エルサレムに集まっている少なくない人たちの思いなのです。

こういう人たちの思いが結果としてイエス様を十字架にかけたように、神様の思いとのずれが、思いもしない結果を生んでしまうことを、私たちは今、実感させられているのではないかと思います。金曜日の祈祷会の後、何名かの方とお話した時に、共通の事柄がありました。それは、ウクライナ戦争をどう受け止めるかと言うことでした。ご承知のように、今のロシアの指導者たちの多くはキリスト者です。それなのに、どうしてなのだろうかということです。私は、直ぐに十字架にイエス様をかけることになったイスラエルの姿を思ったのです。彼らも、神様に従いたいと思っているのです。しかし、結果として、神様から遠く離れてしまっている。その理由は、自分たちが受け取っている神様の姿が、本来の神様の姿とかけ離れているのです。追い求めているはずの神様の御心は、結局自分たちの願望に過ぎないということなのです。そこで大きくずれてしまっているのです。つまり、そこで露わになっているのは、本当に神様の御心に立っているのか、ということなのです。

そうしますと、私たちは対岸から批判するようにして、ユダヤの人たち、そして、ロシアの指導者たちを批判することは出来ないように思うのです。私たちもまた、自分の思いを神様と勘違いして追い求めてしまうという、迷い道に入り込む可能性があるからなのです。だからこそ、神様が何を求めておられるのか、そのことに立ち戻ることがどうしても必要なのです。そうして、神様の御心とは何か、そこに立ち続けて

いくことが求められているのです。そのことを心に置いて、この箇所を読み進めることが求められているように思います。

- イエス様への批判

ユダヤの、特に指導者たちが陥てしまっているあい路がよく分かるような、イエス様とのやり取りがあります。イエス様が神殿の境内で教え始められた時のことです。ユダヤの人たちは「この人は、学問をしたわけではないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」と言ったことです。この「学問をしたわけではないのに」という言葉は、相当にマイルドな訳になっています。聖書が記されています言葉に遡ってみますと、「学がないのに」というような言い方です。つまり、かなり軽蔑がこもった言葉なのです。

神の子であるイエス様が、神様の言葉である「聖書」をよく知っている、それは当然と思うのです。しかし、この時の人々はそう思わなかったのです。勿論、イエス様が神の子であることを知らないということが背景にあります。それと共に神様の言葉、聖書を理解することは決してたやすいことではない、そういう思い込みがあったのです。だから、この聖書を理解するためには、ラビと呼ばれる教師の許へ弟子入りをして、そして、長時間かけて学んで、ようやく理解できるようになる、そのように考えられてきたのです。ですから、偉い先生の友に弟子入りしたこともない、そういう者が聖書を語っていることに、強い戸惑いを覚えたのです。そんなことできるのかと思ったのです。そして、軽蔑を込めて「学がないのに、どうしてそんなことが出来るのか」、そう言っているのです。

それに対して、イエス様はこう言われるのです。「私はただ私をお遣わしになった方、神様の教えを言っている。神様の御心を行おうとしている人は、私の教えが神から出たことが分かる。」と言われたのです。そして、「私をお遣わしになった方、つまり神の栄光を求める人は真実な人であり、不義がない。」とまで言われたのです。この言葉が、とても心に残りました。私たちは、神様の御心に行きたいと思っています。しかし、なかなか神様の御心に生きていると自信を持って言うことは出来ないように思うのです。けれども、このイエス様の言葉の前に立つ時に、はっとさせられたことがありました。それは、私たちは良く「神様の御心に沿わない歩みをして」という言い方をします。しかし、そもそも私たちは神様の御心分かっているのだろうかと思わされてきたのです。これを逆から言い直してみますと、イエス様の語られる言葉が神様から出ていると受け止めていることこそが、神様の御心を行う、つまり、神様の御心に生きる姿であるということになります。ですから、鍵は、イエス様の語られる言葉にこそ、神様の御心が示されていると受け止めるかどうかなのです。

- 御心に生きるとは

そして、ここにイエス様の語られる言葉、これは狭い意味での言葉を越えてイエス様のなさることも含まれていますが、その言葉が神様から出ていると受け止めているかどうか、そこに分岐点があることが示されています。その結果としての御心に生きていない姿として、「あなたがたはだれも律法を守らない」、そして、それどころか律法に生きている私を葬り去ろうとしているということなのです。これは、人々にとって、聞き捨てならないことでした。彼らは、何よりも神様の掟である律法を守ろうとしていました。それも、一字一句破ることがないように、懸命に努力をしていたのです。その自分たちに向かって「律法を守らない」と言っているのですから。人々は「あなたは悪霊に取りつかれている」とまで言います。そして、言葉と裏腹に、イエス様を葬り去るという思いを強くしていくことになったのです。

けれども、ここで改めてイエス様の言われていることを丁寧に受け取るために、立ち止まって考えてみたいと思います。そもそもユダヤの人たちが「律法を守らない」とは、どういうことなのでしょう。私は「誰も」と言われていることに、とても心に残りました。イエス様が言われているのは、一生懸命守ろうとしているけれども、まだ合格点に至ることが出来ていない、そういうことではないのです。「誰も」と言われているように、一人として守っていないということなのです。それは、どういうことでしょうか。これは、部分的に不十分であるということではない。そもそも、根本から間違っているということなのです。

私は、車を運転することが好きです。知らない街を走ることも好きですが、今はカーナビがついていますので、迷うことはほとんどありません。しかし、少し以前、知らない街を走った時、どうしても目的地に行き着かなかったのです。後で分かったのですが、新しい道が出来ていて、曲がる場所を間違えてしまったということなのです。正しいと思い込んでいますから、走れば走るほど分からなくなってしまったのです。その時の私のように、そもそも律法の第一歩目が違っている。だから、それを懸命に追い求めれば追い求めるほど、律法をお与えになった神様の御心からどんどん離れることになってしまったのです。

そのことが明確に分かることが有ります。ここに「一つの業を行ったというので」とありますが、これは、イエス様がなされた、ある癒し、ベトザタの池で病人を癒したことを指しています。人々は、イエス様が安息日に行うことが許されていない医療行為を行ったということで、大問題になってしまったのです。人々は、イエス様は、神様の掟に違反をしている。そういう強い非難を受けることになったのです。ところが、一方で、こんなことがあったのです。神の民の印である割礼を施す時は、定まっていた。それで、それが安息日になることも当然あったのです。そうして、安息日であっても救いの印である割礼を施す行為を行うことは許されていたのです。その

ことを、イエス様は指摘をされて、「うわべで裁くのをやめて」、つまり、字面によって正しいか間違っていると判断をするなどと言われます。

こうして言われるイエス様の言葉を受け止める時、ユダヤの人たちが律法をどう受け止めていたのかが、よく分かるように思います。律法とは、神様の救いを受けるための指南書、条件集であるということです。こういう条件を満たせば、神様に救っていただけるということです。ですから、そこ言葉を満たせるかどうかで、神様に救われるかどうか分かるということなのです。しかし、こういう受け止め方は、神様の御心に沿っているものかと、イエス様は問いかけているのです。

・神様の掟の持っている意味

勿論、十戒、そして、律法を神様から与えられたイスラエルの民は、最初からこれが救いを得るための条件だとは思っていなかったと思います。しかし、徐々にそうして受け止めることになりました。なぜかそうなってしまったのでしょうか。それは分かりやすいからです。神様によって救われている、それもただただ神様の恵みによって救われている、私たちは聖書を通してそう示されています。しかし、私たち人間は、悲しいことに、そのことの確かな印が欲しいのです。これを満たしたしているから、自分は神様に救っていただける。そう受け止められるものが欲しいのです。自分の中の根拠が欲しいのです。そして、本来、奴隷の生活から離れ、初めて自分の自信の責任で神様に従って歩む生活を始めるイスラエルの民に、神様がこう生きていきなさい、こう生きることがあなたの幸いと、恵みの言葉をととして与えられた十戒、律法を、まるで救いの条件集のようにして用いて行くことになったのです。

律法をお与えになった神様の御心と全く違っていましたので、結果、どんどん神様の御心を離れてしまうことになりました。この律法を満たすことが出来ていると思う人は高慢になり、人を裁くことになったのです。一方で、満たすことが出来ていないと思う人は、所詮自分など神様に救われることはないと思うようになっていきました。それこそが、この時のイスラエルの姿だったのです。そして、そこに立っているのです、イエス様がなされたお働きを、一方的に律法を蔑ろにしている、そうして、批判したのです。

ですから、イエス様は律法を破って、自由に生きたということではないのです。むしろ逆です。「私は律法を成就するために来た」と、イエス様が言われる通りなのです。本当の意味で、律法に生きた方なのです。十戒、律法をイスラエルの民にお与えになった、その神様の御心を実現されるためにこそ、イエス様は働かれるのです。

そして、確認として、あのベトザタの池で起こったことは何かを受け止めたいと思います。イエス様は、長年病気を患い、失望の中に沈み込んでいた人を立ち上がらせました。真の意味で、生きる者へと立ち上がらせたのです。神様は、十戒で「安息日

を覚えて、これを聖とせよ」と命じられました。それは、その日に働くような者がいたら罰するぞ、ということではありません。その日、自分の働きをいったん止めて、改めて自分が神様に創られた恵みに立ち戻ることを求めているのです。神様に創られた恵み、全てが完成した問いに「極めた良かった」、神様の喜ばしい意志によって命を与えられている、そのことを受け止め直すのです。そういう時を持たなければ、和足たち人間は、本当の意味で生きていくことは出来ないのです。そのための安息日なのです。

しかし、ユダヤの人たちは、字面を守ることに懸命になりました。何歩以上歩んではいけない、これは仕事、あれは仕事、そうして生きていくことになりました。仕事をしているかどうか、周りの人の候で王に目を光らせる時となったのです。その結果として、最初にこの掟を与えられた神様の御心はどこかに行ってしまったのです。私があなたに命を与えた、それも、本当に喜んで命を与えた、その神様の御心を見失ってしまった時、律法の言葉は単なる規則集になってしまったのです。

・神様の愛に生きる

ですから、「この方の御心を行おうとする者は、わたしの教えが神から出たものか、わたしが勝手に話しているか、分かるはずであ。(18節)」、神様の御心に生きる、それは、自分が既に分かっていると思っている「神の御心」に立っていくのではなく、絶えず、イエス様を通して真の神様の御心を伝えていただく、それを受け取っていくことなのです。そここそ、私たちが、神様の恵みを生きていく道があるのです。

私たちも、神様の御心を行う道を歩んでいきたいと願っています。御心に生きていきたいと思います。そのためにも、私たちは、改めてイエス様の言葉に聞くのです。イエス様のお働きの姿に目を注ぐのです。そうして、イエス様の言葉に聞き、イエス様のお働きの姿に目を注ぐ時に、私たちは、本当の意味で御心を行う、つまり、御心に生きることが出来るのです。この私が神様に愛されていること、それを知って生きることこそ、神様が私たちに何より求めておられることなのです。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、御子をおつかわしになりました。ここに愛があります。(ヨハネ手紙Ⅰ 4：10)」、イエス様の姿にこそ、神様の私たちへの愛が全て示されているのです。このイエス様のお声に聴き、このイエス様のお姿に目を注ぎ、神様に愛されている自分を受け止めて、信仰の道を歩んでいきたいと願います。